博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	長塩 智恵
論文題目	伊勢斎王制度の研究
論文審査担当者	主 査 綾村 宏 ㊞
	審査委員 母利 美和 ㊞
	審査委員 桑山 由文 ㊞

斎王とは、伊勢神宮もしくは賀茂社に奉仕する未婚の内親王（適任者不在の場合は女王）を指す。斎王という存在が、日本古代の天皇制においてどのような役割を有していたのか、という問題は、天皇制における神祇の位置づけを考えるうえで、大きな課題といえる。斎王の起源は、伝承では『日本書紀』の崇神天皇皇女豊鍬入姫命、もしくは垂仁天皇の皇女倭姫命の伊勢大神宮の奉拝にはじまるとされる。のち賀茂社に対しても置かれることとなり、伊勢神宮の斎王を斎宮、賀茂社の斎王を斎院と称した。

斎宮が制度として確立したのは、天武天皇のとき大来皇女が伊勢神宮に派遣されてからであるとされ、最終的に廃絶したのは南北朝時代の後醍醐天皇のときである。その間、約 660 年間で 64 名の斎宮が選出されている。一方、斎院は、平安時代前期、嵯峨天皇のとき皇女有智子内親王が選出されて以降、鎌倉時代前期の順徳天皇の礼子内親王まで約 400 年間に 35 名余が選出されている。本研究は、斎院も視野に入れつつ、基本的には伊勢神宮の斎王である斎宮について、その起源、沿革、そして最大の課題である廃絶の要因の究明を論究している。

第 1 部第 1 章「伊勢神宮の創始と斎宮の源像」は伊勢神宮の創始と斎王の起源の問題に関わる。伊勢神宮の創始に関しては、岡田精司氏の見解をふまえつつ、次のように理解している。伊勢には伊勢国造度会氏の祀る神であるワタライノミヤが存在したが、5 世紀以降、大和朝廷の東国への関心が高まって伊勢がその拠点となり、日神である大王家の守護神が伊勢の地に遷され、もともと存在した神が外宮となり、朝廷の神が内宮になったとする。そしてその画期を、雄略天皇 21 年（477）に求めるが、その理由として、冊封体制での後ろ盾であった宋の弱体化などによる朝鮮半島をめぐる国際情勢の緊迫化により、あらたな権威が必要となり、その結果として伊勢神宮の創建を考えるものである。そしてそれをふまえて斎王の派遣が始まったとする。

記紀にみえる天武天皇以前に斎王として皇女を伊勢に派遣した天皇は、数度の中断をはさみながら含めて、崇神、垂仁、景行、(中断)、雄略、(中断)、継体、(中断)、欽明、敏達、用明、崇峻、推古、(中断)、天武を数える。なおそのうち『日本書紀』の崇神天皇皇女豊鍬入姫命、垂仁天皇の皇女倭姫命の記事は、それに関する何らかの

伝承の存在の可能性を指摘しつつも起源としがたいとし、雄略紀にみえる稚足姫皇女（栲幡姫皇女）が斎王の淵源にふさわしいとしている。その後国内情勢が不安定なため、何回かの中断期間がある。普通にいわれる天武天皇が大来皇女を伊勢神宮に遣わしたのを斎王のはじまりとするのは、斎王制度の再興であり、制度としての確立であったとする。論証に関しては、記紀神話の評価の問題、皇統の問題と大王・皇子女の呼称の問題など、さらなる詳細な検証を求めたいところでもあるが、本論文のテーマに即して伊勢神宮の創始と斎王の起源についての基礎固めの作業といえる。なお、天武天皇が大来皇女を派遣したのは壬申の乱の勝利の奉告であり、斎院の成立が薬子の變の勝利奉告であることとの共通性の認識の問題など課題もある。

次に第2章「斎王の仏教忌避思想の形成」では、政治動向の影響を考慮にいれつつ信仰の対象である伊勢神宮側での動向を分析することにより、神宮の宗教的立ち位置を明らかにしている。最終的には、道鏡政権期の仏教優先主義、中国からの神仏習合の影響などを排除することによって、仏教的色彩を排除した伊勢神宮という性格付けが形成されたが、さらにそれに加えて触穢意識の拡散へのおそれが貞観式の規定にまでつながるとする。伊勢神宮が、他の神社とは性格を異にする存在であるということに関して、一つの見方を提示していると評価できよう。第3章「平安京の斎王御所」は、斎王が初めて居所潔斎する潔斎所（この論考では「斎王家」と称す）の実態についての考察である。斎王が初めて居所潔斎する潔斎所を示す用語を史料から抽出し分析している。丁寧な史料分析をふまえた実態に即した考察は説得力があるといえる。

第2部は、摂関期以降の斎王選出の状況を比較することにより、政治権力と斎宮選定の連関性に着目した考察である。第1章「摂関期に於ける斎王卜定」では、斎王は当時の政治権力の頂点に君臨していた摂関家権力でも一存で決められない存在であったとする。斎王はあくまでも天皇の即位儀礼の一環であり、新帝の即位状況によって実施の時期が異なることもみられる。斎宮の候補者は卜定に先だって決定されるが、斎宮の選定には、政治的状況が反映することも多く、個別的には様々であるが、やはり即位儀礼の一端であることが制度の継続の重要な側面である指摘は妥当であろう。そのことは斎院は早くから即位儀礼との関連性がなくなったため、はやく廃れたとの指摘にもつながる。

第2章「院政期に於ける斎王選考の問題」は、院政期の斎王選出に関する考察である。白河天皇は皇位後継者を1人に限定し、その他の皇子たちはみな出家させている。その結果、親王の数が激減し、その娘である女王がほとんどいなくなった。そのため鳥羽天皇の斎宮と斎院は、白河法皇の落胤から選出せざるを得なかった。このように斎王制度には、治天の君の裁量が斎王の選出に大きな影響を与えるという制度として脆弱な面を有していた。斎王の制度としての実態をどのように理解するかであろう。制度としての継続性とその時代の政治的状況との関連性の問題であろう。

第3章「鎌倉後期の斎王制度」は、鎌倉期の斎宮の立場と存在意義につき考察し、斎宮の廃絶について論証したものである。鎌倉時代前半は、天皇即位直後の斎宮卜定こそ行われなくなるが、斎宮の存在は天皇の権威を高めるのに重要であった。しかし

皇統が持明院統と大覚寺統に分裂し、皇位継承が不安定になったため卜定の機会が失われることになった。後醍醐天皇は、大覚寺統の中継ぎ的存在の天皇という立場を打破するために、中宮所生の第一皇女権子内親王を齋宮に選出し、元弘の変直前に齋宮卜定を行った。しかしながら倒幕計画が失敗に終わり、天皇は隠岐に配流になった。そして権子内親王は伊勢群行を果たすことなく野宮での退下となる。中断していたものを、後醍醐天皇があえて挙行した齋宮選出がその役割を完遂することなく終わったことは、齋宮制度に大きな打撃となった。後醍醐天皇は、復位後に再度齋宮祥子内親王を選出するが、こちらも野宮からの退下に終わる。齋宮は大覚寺統の皇統のもとに行われ、持明院統の天皇では行われなかった。持明院統が皇位を継承する室町幕府もとのでは齋宮は再び復活することはなかったのである。皇統の継承を齋宮派遣と関連づけたことは評価できよう。この観点での研究をさらに進めるべきであろう。論文全体の構想として、研究課題を齋王制度の廃絶の要因に主眼を置くならば、第2部により重点を置くべきだと思われる。

本論文はいくつかの課題を有しているとはいえ、齋王を制度として考えたうえで、皇統の問題として捉えた成果は評価できよう。

以上の所見にもとづき、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。